豊中市の社会教育のあり方について

【資料編】

令和5年（2023年）6月

豊中市社会教育委員会議

ヒアリング結果一覧

行政機関

（１）青少年交流文化館いぶき
（２）郷土資料館
（３）公民館
（４）図書館
（５）学び育ち支援課

社会教育団体ほか市民

（６）豊中市人権教育推進委員協議会
（７）青少年団体連絡協議会（ボーイスカウト豊中協議会、ガールスカウト豊中地区協議会、NPO 法人豊中市青少年野外活動協会、豊中市こども会連合会等）
（８）NPO 法人北摂こども文化協会
（９）公民分館協議会
（１０）公民館登録グループ
（１１）図書館ボランティアグループ（おはなしポケット）
（１２）学校支援コーディネーター（箕輪）

教育機関

（１３）大阪音楽大学
（１４）大阪大学

企業

（１５）株式会社コタキクリエイティブワークス

※次ページより、ヒアリング個票（敬称略）

（1）青少年交流文化館いぶき

日時	令和 4 年（2022 年）7 月 12 日
出席者	青少年交流文化館いぶき　館長 久住、副館長 津川
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

1．組織目標

・「今日的課題に対応する青少年育成へ」社会的に困難を抱える青少年への支援をめざす。

・青少年に特化した居場所。学校でも家庭でもない、第 3 の居場所。安心して過ごせる場づくり。

2．現状、主な事業

・不登校児童生徒の側面支援。

・青少年の学習支援。

・若者のバンド活動などの支援。

・高校生パフォーマンスフェスタなどの高校連携事業。

・青少年団体連絡協議会の育成・支援。

・様々なしんどさを抱えた子どもたちの居場所づくり。

3．課題または今後の展望

・不登校児童生徒の増加。

・社会的構造の問題もあり、根本的に手を打たないといけないが、にわかに解決策を見つけられない。

・学校教育との連携をより活発にするにはどうすればいいか。学校教育と社会教育は車の両輪。

・コーディネート役となる職員も以前に比べて減っている。自分の時間を費やしてでもやりたいという人がなかなかいない。「気付いたら社会教育の輪にいた」としたい。

・包括的かつ継続的な支援が必要。

・「元気な子からしんどい子まで」幅広い層へのアプローチが必要であり、居場所づくりが求められている。従来型の健全育成だけではなく、福祉的側面からの支援も必要。

（２）豊中市立郷土資料館

日時	令和４年（2022 年）７月５日
出席者	郷土資料館 館長 兼 社会教育課 主幹 清水
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．施設の目的、キャッチフレーズ

・まとめる　市内の歴史・文化財をまとめて調査研究、タイムリーな成果の公開・発信
・まなぶ　　誰もがわがまち豊中の歴史・文化財に親しみ、楽しみ、学べる場の提供
・つなぐ　　未来を創造する資源としての歴史・文化財をみんなで次世代の子どもたちへ

２．現状

・社会教育の観点を持ちながらそこに集まる人と関わり、学びを育んでいくことが目的。市民にとっての学びも尊重しながら行政職員としての知識・良識を持って接することが必要。
・ただ見守るだけでなく、軌道修正もする。行政の正しさや予定調和を押し付けることはせず、絶妙な調整力が必要で、とても難しいことではあるが、それこそが社会教育であり、意義のあること。決して好事家だけのための施設であってはならないし、学芸員の知識を正しく伝えねばならない。ぶつかりながら軌道修正していく形が理想。社会教育なので、大人相手であっても「教育である」という視点を忘れないことが大切である。

３．主な取り組み

・文化財の資料の調査・収集・整理・保存
・史跡散策や史跡等の一般公開、文化財資料の展示
・講座・講演会等

４．これまでの取り組みで特に印象に残っている事業

・平成 17 年に開催した子ども対象の文化体験プログラム事業。1 年間、小学生と毎週土日に穂積の貝の化石調査を行った。1 年間一緒に作業をすることで、子どもであってもこちらの理論を学習していき、だんだん方向性が一致してくる体験をした。

５．課題または今後の展望

・生きがいの多様化に歩調を合わせていくことの難しさ。
・より深い情報の収集とそれを個々の職員が吸収・消化して、場面ごとに発信できるよう、常に努力することが必要である。
・人材を把握しておくことも行政の役割。

（３）公民館（中央・蛍池・庄内・千里）

日時	令和４年（2022 年）８月９日
出席者	中央公民館　館長 弘中、蛍池公民館　館長 守屋、庄内公民館　館長 山本、 千里公民館　館長 田中 社会教育課　課長補佐 荒井、副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．組織目標

・市民の多様化・高度化する学習欲求や現代的課題に対応した学習機会の充実と情報の収集・提供。
・公民館登録グループや社会教育関係団体等に対して学習成果を広く社会に還元できる機会の創出。
・公民館、公民分館、学校、地域諸団体との連携を強化し、地域における社会教育活動（分館活動）を進める。
・安全で効率的な施設運営・施設管理を実施し、市民の利便性の向上を進める。

２．現状、主な事業

・環境学習、人権啓発、健康づくり、子育て・子育ち・親育ち等に関する現代的課題や生活課題の解決に向けた事業や、地域の魅力を発信する事業を充実させるとともに、公民分館などの地域諸団体、高校・大学などの教育機関、地域の事業者等と連携を図りながら、ＩＣＴ機器やインターネットを活用して、幅広い分野と多様な手法により学習機会の充実に努めている。
・公民分館との連携による地域における社会教育活動の推進（分館交付金などを財源として各公民館が分館講座、分館体育祭、分館文化祭、社会見学等を実施）
・４公民館それぞれの地域性を生かした事業企画。各公民館により地域課題も異なる。いかに地域のニーズをつかみ、その地域の市民や団体と連携していくかが重要。
・図書館やいぶきなど他の社会教育施設との連携。
・人権課題や地域課題など、行政として取り組むべき事業もある。

３．課題または今後の展望

・市全体としてのデジタル施策の推進の立場から、教育委員会としてオンライン・オンデマンド講座の拡充が求められている。
・公民分館との関わりの中では、分館関係者の高齢化がすすみ、公民分館活動をすすめていくための人材が不足し、コロナがそれに拍車をかけている状況がうかがえる。
・時代の変化とそれに伴う社会教育のあり方。求められる新しい公民館像とは。社会教育は市民の人生を豊かにするものであり、可能性は無限大。

（４）豊中市立図書館

日時	令和４年（2022 年）7 月 13 日
出席者	読書振興課　課長 須藤、主幹 西口
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．組織目標

・（仮称）中央図書館基本構想　p.41 豊中市立図書館の基本コンセプト「つながる。わたしの図書館で」

・豊中市立図書館の中長期計画（グランドデザイン）のキャッチフレーズ「まち、ひと、つながる　好奇心の駅」

２．現状

・「つながり」とは、施設面だけでなく人の人とのつながりも意味する。市民活動の拠点や、国際交流や子育て世代の交流の場にもなる。人とつながったり新たな情報を得たり、図書館の使い方は市民一人ひとり全然違う。WEB でもつながることができる。

・地域ごとに施設等が分散しているため、地域の市民がどこに住んでいても利用できる。乳幼児から高齢者まで幅広い年代の市民が利用している。

・他部局との連携や、市民協働事業（しょうない REK、北摂アーカイブス）も活発

・学校との連携としては、各学校への学校司書の配置により、公共図書館からの支援が可能となっている。

・ボランティアの存在によって図書館職員だけではできない活動の拡充がある。

３．主な事業

・学校と公共図書館の連携

・豊中市子ども読書活動推進計画　策定（現在は、豊中市子ども読書活動推進計画　第２期豊中市子育ち・子育て支援行動計画こどもすこやか育みプラン策定時に同計画に理念を包含、読書環境を整え子どもの読書を支える活動を推進）

・市民協働事業（障害者サービス、子ども読書活動、しょうない REK、北摂アーカイブス、図書館サポーター、合同研修、映画会等）

・住民生活に光そそぐ交付金（2010 年度単年）を機に地域の課題解決事業として医療・健康情報、多文化共生、ビジネス・就労支援、子育て支援等の資料を充実できた。

・図書館運営を振り返り、効果的・効率的な運営とより一層の図書館サービスの向上および地域との情報共有を図る仕組みとして図書館評価システムを導入

・豊中市立図書館の中長期計画（グランドデザイン）の公表

・豊中市（仮称）中央図書館基本構想の策定

4．課題または今後の展望

・必要な情報が必要とする市民へ伝わらないという課題がある。(障害のある市民や外国にルーツのある市民などマイノリティへのアウトリーチサービスなど)

・デジタル機器を使いこなせる市民と使えない市民とのデジタルディバイド（情報格差）

・限られた人材、予算の中での効果的なサービス

・人生 100 年時代となり、情報の新陳代謝が激しい状況で生涯学習、リカレント教育やリスキリングなどが注目されている。豊中の多様な社会教育に関する施設がつながる中で、いぶきや郷土資料館、公民分館など、個人でも団体でもいつでも学びの機会を持てるという環境整備、そのことを市民に広く知ってもらう情報発信が今後重要になると考えている。

（５）学び育ち支援課

日時	令和４年（2022 年）８月 10 日
出席者	学び育ち支援課　課長 岡本、課長補佐 金井
	社会教育課　課長補佐 荒井、副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．組織目標

・学校、家庭、地域が、それぞれの特色を活かしながら連携・協働し、次世代を担う子どもたちの学びや育ちを支援する活動を推進する。

・世代を超えてつなごう　学校・家庭・地域の輪
　→学校地域連携ステーション事業（国名称：学校支援地域本部事業）

・地域と学校・家庭がつながり広がる教育コミュニティづくり
　→とよなか地域教育コミュニティフォーラム

２．現状、主な事業

・地域関連４事業（地域学校協働活動：地域教育協議会（すこやかネット）、地域子ども教室、学校地域連携ステーション、家庭教育支援事業）

・地域関連 4 事業は、公民分館や校区福祉委員会にも関わる方々にも協力していただきながら、地域と学校が連携・協働して、次世代を担う子どもたちの学びや育ちを育んでいる。

・地域住民も教員同様、教育の担い手となっている。

・学校支援コーディネーター研修、とよなか地域教育コミュニティフォーラム等の開催。

３．課題または今後の展望

・地域の担い手の特定化、一部の人の負担が大きい。

・単発のイベントなど、スポット的に協力できる人はいても、日常的・継続的な取組みとなると困難な地域が多い。

・地域の人と人の橋渡し役、地域と学校の橋渡し役、所謂コーディネーター的な役割を担う人材の発掘、育成が難しい。（→学校支援コーディネーターの育成やスキルアップのための研修の開催）

・地域により世代間の交流が難しく、新しい人材が参画しづらい現状があるかもしれない。

・地域によって、学校との関係、地域の中の組織どうしの関係、地域の人材層、などの格差が大きい。

・社会教育は、定められたカリキュラムで行われる学校教育と違い、幅広い多種多様な学びや体験を通じて、新たな経験や人と人との出会い、つながりを生む機会にもなるもの。

・人とのつながりで形成される地域社会の維持、活性化にも社会教育活動が必要で、時代とともに、社会教育のかたちが変わったとしても継続されるべきものである。

・これからの社会教育活動の支援・振興のあり方が課題。
・社会教育は「無用の用」。「相互学習（学び合い育ち合い）」。一見役に立たないと思えるようなことでも、地域住民が地域の課題の解決に向けてお互いが話し合い知恵を出し、活動に移していくことを通じて、地域力の底上げ、地域の活性化につながる。自治力の形成にも繋がる。
・コミュニティ・スクール（学校運営協議会）で、地域と学校で共有される教育目標（子どもたちをどのように育んでいくべきか）を、地域学校協働活動に円滑につなげていく体制の整備が求められている。

（６）豊中市人権教育推進委員協議会

関係課：社会教育課

日時	令和４年（2022 年）９月 29 日、10 月 18 日
出席者	豊中市人権教育推進委員協議会　会長 青木、副会長 渡邊 社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．人権協について

・きっかけは公民分館から人権協へ。人と人との関わりの中で今の活動につながっていった。PTA から入る人も多い。
・人権について学び、「差別を解消していかなければならない」という思いを大事にしている。
・皆の「学ぼうとする気持ち」をどれだけ本気にさせられるか。出会いや学びの提供。勉強を通じて、人とつながることができる。
・PTA、とりわけ若い子育て世代との関係は重要。対面し、伝えたいことはしっかりと伝えていきたい。

２．地域活動について

・活動は楽しい。人と人との出会いが素晴らしい。
・楽しくなければ続かない。イベントごとは楽しいもので、毎回わくわくして行っていた。そういう思いをした人が次の活動にまたつながる。嫌々だったら続かない。
・活動は嫌にならずに続けることが大切。そしてどこかでバトンタッチすること。
・地域活動とは、毎日生活をしている人たちとの関係。生活、息遣いをしている人たち。
・声かけは大事。皆に楽しい思いをしてもらおうと意識してやっていることを評価したい。次につながる。若い人も自分の姿を見て育ってくれていると感じる。そういうリーダーを増やせば、いいまちになる。
・人のつながりは、持ちつ持たれつで、人間関係はこじれないようにしなければいけない。
・豊中市は 40 万人都市で色んな人がいるが、どうしても同じ世代の人としか関わらない。だけど違う世代と積極的に関わることで、地域への愛着心や地域のコミュニティづくりに貢献できる喜びを感じる。昔の自分を思い出させてくれるのも地域。
・ためらうことなく皆で進めている。失敗を恐れないで取り組んでいる。地域性があることを恐れてはいけない。

３．その他

・社会教育はあらゆる分野につながっている。
・学校教育と社会教育の関係をもっと重視したい。学校管理職は土日出勤含めオーバーワー

クになる。それが地域との関係で「楽しい」と思えるようにするにはどうすればいいのか。先生が学校の外に出てくるのは大変。日常的に、学校内において地域との「協働」の取組みを作っていく必要があるのではないか。多くの教育課題を前にそれに対応する教職員数は圧倒的に乏しい。そこを補う地域の役割はいっぱいある。例えば、教員のトイレ休憩確保のための見守りや給食、校外学習引率補助など、「協働」の役割は挙げればきりがない。そのようなことを通して、互いのあり様を理解し合うことができてこそ、学校教育と社会教育の連携のはじまりとなる。その作業を怠るとお互いの言い合いレベルで止まってしまう。

・社会教育職員はいろんなことに目を向けてほしい。もっと目を行き届かせてほしい。
・教育委員会の中で社会教育の位置が定まっていないと感じることがある。

（７）青少年団体連絡協議会

関係課：青少年交流文化館いぶき

日時	令和４年（2022 年）９月 12 日
出席者	ボーイスカウト豊中協議会　植村、ガールスカウト豊中地区協議会　内田、豊中市子ども会連合会　植村、NPO 法人豊中市青少年野外活動協会　顧問 長岡、岩井 社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録） 青少年交流文化館　館長 久住

１．これまでの取組みの中で経験してきたこと

・子どもたちとの関わり。キャンプ、ハイキング等

・責任ある指導者を育てる。募金活動や清掃活動。「自己開発・人との交わり・自然とともに」の３つの柱がある。（ガールスカウト）

・35 年前に子どもをボーイスカウトを入れて、気が付けばリーダーに。ボーイスカウトでの活動は「人としてどうあるべきか」を学べる。昇級していくには社会教育として論文も書く。勉強すればするほど奥が深く、面白い。自身の人生のキャリアアップにも役に立つ。

・活動歴 48 年。仕事と家庭とボランティア活動、３つの両立は大変。必ずしも良いことばかりではない。自然を愛する心、子どもを愛する心、少しでも子どもたちのためになれば、という気持ちでやってきた。皆、手弁当で活動している。ボランティア活動は自己研鑽の場であると同時に社会貢献の場。何歳になってもできる。

２．課題または今後の展望

・子どもはどんどん減っている。活動の担い手となる後継者も不足。今の若い人は皆忙しい。そういった時代の変化にどう対応していくか。

・豊中市内の北部と南部の違い。子どもたちの経験値に差がある。

・スマートフォン・SNS の普及による変化。最近の子どもは、活動中でも困ったことがあるとすぐ親に LINE し、親が解決しようとする。成長の芽を摘んでいるのでは、と感じることもある。

・発達障害の子どもの増加。親が「うちの子は発達障害なのでできません」というケースも。

・すぐに結果を求める保護者が増えてきた。

３．その他

・行政職員もボランティアに関わるべき。誰も何もせず、我々ボランティアに期待しないでほしい。皆が率先して動いてこそ社会は変わる。

・子どもたちが成長する過程で、多くの大人たちの支援が必要。大人には理性・経験・社会性・お金がある。子どもには未来しかない。

・社会教育の原点は人権。時代が変わろうと、そこは変わらない。

（8）ＮＰＯ法人北摂こども文化協会

関係課：青少年交流文化館いぶき

日時	令和 4 年（2022 年）9 月 14 日
出席者	NPO 法人北摂こども文化協会　理事長 川野、長木
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）
	青少年交流文化館　館長 久住

１．これまでの取組みの中で経験してきたこと

・元々は 1970 年代の「おやこ劇場」から発祥。歴史や文化のない新興住宅地で豊かな成育環境を子どもに与えることが目的。とんど祭りや夏祭りなど地域のお祭りに加えて年に 4 回の文化鑑賞会（お芝居や人形劇など）を小学校の体育館や公民館を使って事業展開。

・1998 年に NPO 法人化したことで「共助（私たちの子どものために、地域の子どものために）」から、より公益的に。当時は最も社会教育が活性化されていた時期で、「自分たちがやっている活動は社会でどういう位置づけなのか、どういう方向性を今後めざしていくのか」考え、研修を受けたり大学の先生から学んだりしながら活動してきた。

２．行政に求めること

・行政は委託主・民間の現場のリアルな声を拾い、課題を把握してほしい。手放したり丸投げしたりするのではなく、連携し、現場の声を政策に反映したり課題解決に向かって一緒に取り組んでほしい。それでこそ指定管理の役割を十分に果たせる。

・他の NPO 団体とも連携・情報交換する場を設けてほしい。どこの団体でも共通する課題はあるはず。

・行政が社会教育の意義をもっと示してほしい。今の社会教育は学校教育の補完のような、下支えのようなイメージだが、本来の社会教育の機能はそんなものではない。

・最近では民間も非認知能力（意欲・意志・情動・社会性に関わる IQ などで測れない要素）を高める取り組みを行っている。しかし、それは常に大人が存在している、決められた遊びであり、対価や評価を常に意識したもの。時間かけて熟練していくような遊びではない。民間での取り組みは、お金のある教育熱心な家庭の子どもが受けられるサービスでしかない。できるだけ保護者の意識の差も関係なく、子ども達が学べるように、行政が本来の社会教育を示してほしい。

３．その他

・私たちは、「一人一人の育ちを見ていく」という意識がある。人間のことを、地域資源だとか人材だとは思っていない。ひとりの人間の成長を見ているし、その存在は本人の意思に基づいていて、まちに寄与するもの。

・イギリスでは地域でケースごとの情報共有の場がケース会議のように開かれている。子どもたちを地域の大人（学校・親・職員など）で見守り、気になる事案があったら報告し合ったりしている。
・子どもと信頼関係を築くには、まずは子どもに頼られる関係性を作ること。ゆるい相談窓口機能となる必要がある。
・コーディネーター役となる地域の専門職員がいて、必要であれば福祉サービスにもつなげてほしい。
・今後、重要だと考えるのは主権者教育と性教育。
・自然発生的なつながりづくり。公（パブリック）が閉じられている、と感じることがある。分断を超えるきっかけづくり、不明瞭にいられる場づくりを大切にしたい。
・立場も思いも異なる人をどうつなぐのかという視点が、生活課題を解決していくきっかけになる。

（９）公民分館協議会

関係課：公民館

日時	令和４年（2022 年）９月 15 日
出席者	豊中市公民分館協議会 会長 兼 東泉丘公民分館 分館長 大濱
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）
	中央公民館　館長 弘中

１．自身の活動について

・PTA、健全育成会、公民分館を経験。子供の頃から生徒会長など何でもリーダーをやってきた。

・公民分館に入ったときに、地域の体育祭や文化祭などこれまで外から見てきて「もっとこうしたら良くなるのでは」と思っていたことに取り組み、変革した。

・自分の息子も活動を手伝ってくれている。皆「分館活動は若い人が少ない」などと言うが、子どもが小さい頃から参加する習慣をつけさせれば、大学生になっても自然と手伝ってくれる。

２．課題だと感じること

・古い体制を変えなければいけない。昔から長く活動を続けている人たちは変えることに抵抗がある。感覚のズレを感じる。いつまでも昔のやり方では、若い人は入ってこない。古い体制は一掃して、もっと自由な活動のあり方にしていきたい。

・女性軽視が根強いと感じる。41 公民分館の中で女性の分館長は 4 人だけ。いわゆるオールドボーイズネットワークの中での人選というシステムが存在し、優秀であっても女性はその中に入れない。そんな中、役職を得ても男性役員とは対等には扱われなかったりも経験した。

３．活動の意義について

・モチベーションは「楽しいから」。皆でイベントをやって親しくなったり、次はどう変えよう？と考えたりするのも楽しい。不遇な目に遭っても闘争心を掻き立てられて、逆に楽しい。楽しかったらそれでいいと思うし、これからも行事を開催して、皆に楽しんでもらいたい。地域全員を喜ばせることはできなくても、何人かが喜んでくれたらいい。

・「社会教育」とは結局、学びであり、生きていくうえで必要なことだと思う。活動を通していろんな人と関わり、学び、悩み、成長する。

・行事は楽しむだけじゃなくて、学びがある。人間のコミュニケーション能力を育てる。コミュニケーション能力は生きていく上でとても大切。

・民間の講座は高いが、公民分館の講座は地域の人であれば誰でも学べる。体育祭では同じ

マンションというだけですごく熱心になって応援する。それらのつながりは、顔見知りの関係を作ることができ、地域の防災にもつながる。

・社会教育は揉め事の予防になる。近隣トラブルも含め、見知った関係だと揉め事は起きにくい。

4．行政に求めること

・いろいろな部署が様々な計画や方針を出しているが、職員は本当に分かっているの？と思う。学校の先生ですら、公民分館活動について分かっていないこともある。新しく赴任した小学校の先生に「なぜ学校に公民分館の部屋があるのか？」とか聞かれて驚いたことも。学校が活動の拠点なのに、コロナ禍は学内にすら入れなかった。

・「公民分館は歴史があって豊中の宝」などと言うのであればもっと地位向上してほしい。

（１０）公民館登録グループ

関係課：公民館

日時	令和 4 年（2022 年）9 月 15 日
出席者	中央公民館登録グループ（豊中二胡倶楽部）　藤代
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）
	中央公民館　館長 弘中

１．公民館登録グループ活動について

・豊中二胡倶楽部（中央公民館登録グループ）は、2017 年結成。現在 10 人程度。

・二胡の楽器について、知ってはいても、生の演奏を楽しめる場は少ない。二胡の演奏を楽しんでもらうためにデイサービス等に行っている。

・デイサービスには、ボランティアセンターからの紹介で訪ねて行った。マンション管理組合の老人会等でも演奏したことがある。積極的に施設に出向き、発表の場をつくることによってモチベーションも上がる。

・演奏する曲は、中国の伝統的な曲だけでなく、蘇州夜曲など、皆さんに親しみのある曲や季節の曲。演奏を伴奏にしてカラオケのように歌われることもあり、「演奏聴いてるのかな？」と思うこともあるけれど、楽しんでもらえればいいか、という気持ちでやっている。

・思った以上に喜んでもらえているよう。こちらが聴いてもらいたくてやっているのに、思いのほか「また来てください」と言われるのは、ありがたい。

・コロナで活動が止まってしまっていたが、今は再開できて良かった。

２．経験して感じたこと

・ボランティアは「してあげる」みたいなイメージがあるが、「ギブアンドテイク」だと思う。自分も楽しませてもらおうと思ってやっている。

・ボランティアは無理をしてするものではない。お互い楽しい、Win-Win の関係。

・豊中は目を向ければ、いろんなところで良い取り組みをやっているがあまり知られていないように感じる。うまくつながっていくと、もっと若い層にも広げていけるのに、と思う。

・活動できるところがもっとあればいいのに、と模索中。もっとつながっていければ。

（１１）図書館ボランティアグループ（おはなしボランティアポケット）

関係課：読書振興課

日時	令和 4 年（2022 年）9 月 22 日
出席者	図書館ボランティアグループ（おはなしボランティアポケット）中井、今井、石垣、阪本、藤原、松岡 社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．団体概要

・1993 年設立、現在 70～80 名のメンバーがいる。市主催の養成講座を受講した人で構成されたグループ。放課後子どもクラブをはじめとした市内のさまざまなところに絵本の読み聞かせボランティアとして派遣される。

・絵本が好きで、子どもが好きな人たちが集まっている。

２．活動の中で経験してきたこと

・活動は楽しい。子どもたちが喜んでくれると私たちも嬉しい。「次はどんな絵本を持っていこうかな」と考えるのが楽しい。

・コロナ期間は活動ができなくて辛かった。

・子どもの反応は素直。大人の感覚とは違い、ちょっと変わった絵本が喜ばれるなど、折々の発見がある。

・読み聞かせは、高齢でもできるボランティア。メンバーで助け合いながらやっているから、困ったことがあれば相談できる。

・子どもたちの笑顔から学ぶものもある。教育という観点でやっていないし、絵本は押し付けるものでもない。気持ちや感動を共有（シェア）するもの。読み聞かせが終わった後に「どうだった？」と感想は聞かない。

・子どもたちがいろんな人と接する機会が減っている中で、「声をかけてもいい大人」という存在であれることの重要性。

３．その他

・地域の図書館は集える居場所なので、これからもなくならないでほしい。

（１２）学校支援コーディネーター（箕輪）

関係課：学び育ち支援課

日時	令和 4 年（2022 年）9 月 26 日
出席者	学校支援コーディネーター 兼 箕輪公民分館 分館長 福本
	社会教育課　副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）
	学び育ち支援課　課長補佐 金井
	蛍池公民館　山本

１．活動をはじめたきっかけ

・祖父が分館長をやっていた。

・アクアユートピアの取組みは本年度で 35 年を迎えた。「なぜこの活動を続けるのか」「どういう経緯で始まったか」という地域の思いを次の世代にも引き継いでいくことが大事と考える。

・前分館長は若手だった自分にも分け隔てなく接してくれた。先人の「千里川をできるだけ綺麗にしていこう」という気持ちが胸を打った。

・「学校支援コーディネーター」は校長先生から声をかけられて始めた。

２．主な取り組み

・空と緑のミュージアム

・すくすく農園教室（地域の子ども達が種まき・田植え・稲刈り・脱穀など一年を通して農作業を体験できる）

・ハート池教室（身近な水辺の生き物調べや、食物連鎖といった環境学習支援を中心にすえたビオトープ池）

・アクアユートピア（千里川を中心とした清掃などのさまざまな活動）

・ホタル観察会

・モンキーブリッジ（箕輪小学校にある子どもたちの遊具。地域の人びとが丸太などを運んできて作られた）

・その他、体育祭・文化祭・盆踊りなどのさまざまな取り組み。また、それらの活動をまとめた PR 冊子を作成し、地域の魅力を情報発信している。

３．経験して感じたこと

・地域・学校・保護者のバランスの良い関係づくりが大切。三位一体。

・地域の人がゲストティーチャーとして学校に入ることで、子ども達はもちろん先生方とのコミュニケーションがとれ、学校との信頼関係、連携がより大きく前進した。

・地域活動の中には、いろんな人の細かい配慮がたくさんある。たくさんの配慮が集まっ

て継続している。歯車のようなもので、なにか一つを間違えると大きく変わるし、なにかが止まるとすべてが止まってしまう。

・高齢化は必ずしも悪いことだけではなく、先人の知恵があるとも言える。

・社会教育は、やっていく過程の中に意味があるもの。

・田んぼをゼロから作る過程はすごく大変だったし、田んぼとして安定させるために「とりあえず３年はかかる」という気持ちで取り組んできた。次年度で６年目を迎えるが、携わってくださる方も増え、より地域が学校に入りやすくなった。

（１３）大阪音楽大学

日時	令和 4 年（2022 年）11 月 25 日
出席者	大阪音楽大学 連携支援センター リーダー 吉川、西村
	社会教育課 副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．豊中市「サウンドスクール」事業について

・豊中市「サウンドスクール」事業は大阪音楽大学の学生を中心に、卒業生や教員などを豊中市内のこども園や小学校、中学校に派遣し、出張演奏会の開催や授業支援及びクラブ活動支援を行う事業である。平成 18 年（2006 年）から始まり、近年は年間 40～50 日は派遣を行っている。コロナ禍以前はもっと多かった。（年間 110 日前後）

・演奏に対して、子どもたちの反応はダイレクトで、大人と違って建前がない。「こういう演奏なら喜んでもらえる」など、派遣者にとっても勉強になり、非常に良い取り組みだと感じる。

・実施前に、必ず担当職員が学生に説明していることは「卒業後も活用できる経験を積んでほしい」ということ。演奏だけでなく、観客を飽きさせないプログラムの構成力や司会進行（トーク力）も学べる貴重な場と考えている。

・学生については、ある程度の実力があり、社会的なマナーを身に付けている人物を選出している。報酬を伴う演奏（授業支援）なので、プロ意識を持った責任感のある学生を送り出す。その条件を踏まえ、比較的学習スケジュールに余裕のある学部 3・4 年生や院生を中心に選出している。

２．社会教育・社会連携について

・現在は大学と市で結ばれている協定はあるが、今後、本当の意味で社会連携の取り組みを進めていくならば、市と大学だけではなく、企業や NPO 法人なども含めた社会教育など、地域ぐるみでもっと巻き込んでいく必要がある。

・「音楽あふれるまち とよなか」を掲げているが、まだまだ広がりが持てていないのではと感じる。はたして豊中市民の何人が「音楽あふれるまち」だと認識しているのか。スローガンだけではなく、市民が意識するレベルまで至るには、もっと広がりを持った取り組みが必要。

３．今後の課題だと感じること

・大阪音楽大学のザ・カレッジ・オペラハウス等での演奏会について、現在の客層は高齢の方が多いが、若年層にも広げ、老若男女みなさんに生演奏に親しんでもらいたい。

・こども園や小学校、中学校は豊中市「サウンドスクール」事業等の事業もあり、生演奏を

聴きに大学まで足を運んでいただくこともあるが、高校生の層は関わりが薄いように感じる。土日にも演奏会を行っており、間近で一流の演奏などが聴ける機会なので、もう少し興味を持ってもらえると嬉しい。

・一度、繋がりが持てればアナウンスもできるが、その最初のハードルを越えるのが難しい。リピーターになってもらえたら、ゆくゆくは音楽の道に進みたいという若者もあらわれる可能性もあると考えている。特に近隣の若者に聴いてもらいたい。せっかく徒歩の距離に大学があるので、もっと活用してもらいたい。

・ストリートピアノを置けば音楽あふれるまちになるのか。学生が卒業しても地域で音楽を資源に活動、生計を立てられるほど浸透していくことが大切。

（１４）大阪大学

日時	令和 5 年（2023 年）3 月 8 日
出席者	大阪大学　共創推進部　博物館・適塾記念センター等事務室　室長 川添、田中 21 世紀懐徳堂　特任研究員　上林、肥後 社会教育課　課長補佐 荒井、副主幹 島津、主査 佐々本、主査 田井（記録）

１．公開講座について

・年間通して全 9 回の開催。大学内の全学部の先生方に声をかけているため、医学・理学・工学・人文学など講座テーマが多岐に渡る。主に中之島センター（中之島センター改修中のため、令和 4 年（2022 年）度はアートエリア B1（中之島）及び大阪大学会館（豊中））で開催。交通の便が良く、仕事帰りの人も寄りやすい立地。対面とオンラインのハイブリッド形式。

・参加者層は、年配男性が多い。公民館や駅などのチラシを見て、「教養を深めたい」と考えて参加する人が多い印象。

・参加者がそれぞれに「学びたい」という意欲を持って参加しているので、多少難しい内容でも満足度は高い。「最先端の研究について学べる」「社会課題解決のヒントを得ることができる」と好評。リピーターも多い。

・公開講座は講義形式の学習スタイルだが、昨年 12 月から月 1 回開催している「ワニカフェ」では専門家と学習者が対話できる形式。「面白い巨塔」編と題して、大阪大学医学部附属病院の医師等が講師となっている。

２．社学共創、アウトリーチについて

・大阪大学の取組みについて関心を持っていただき、社会にアウトリーチしていくという大学としてのミッションがある。専門家の話を聞き、対話を深めることは、すぐに社会課題の解決へと繋がらなくても、社会貢献の場づくりとしての役割を果たしている。

・YouTube など、研究者が個人的に発信できる場は増えているが、リアルな場はいまだ限られている。市民と直接対峙する場は、PR の場としても活用できるはず。専門知を市民に伝えるのも研究者の役割の一つであり、ロボットなどの商品化やクラウドファンディングなど、未来に向けた投資にも繋がる。自身の研究が専門家にだけでなく、市民レベルまで伝えていくことはチャレンジでもあり、プラスに捉えてもらいたい。

・例えば、ロボットが作られると今の仕事が奪われるのでは？という市民レベルの疑問があるとする。そういった分断を早期の段階で解消していくのがこういったアウトリーチ。コミュニケーションであり、解決策の一つとも言える。

・そもそも研究費をいただいて研究をしているので、広く市民に還元していかなければなら

ないというマインドもある一方で、ただの「ボランティア」だと捉えられてインセンティブの低い仕事だと見なされることもある。かける労力に対して、正当に評価されないと捉えられる。人手や予算など少ないリソースの中で、早急にやらねばならない課題ではないと研究者に思わせてしまうのは大学側の構造の問題。強制もできない点が難しい。

3．行政と大学の連携について

・行政と大学がタッグを組むメリットは、地域の課題を一緒に考えられるということ。行政側に「こういう課題があるから、一緒に考えてほしい」と提示されれば、大学は研究機関としてそれらの専門家にあたることができる。

・研究者個人の活動としては、サイエンスカフェや哲学対話など既に色々あり、飽和状態とも言える。大学側が研究者にアウトリーチを持ちかける際は、「市民からデータを取れる」など研究としてのメリットがあるか、教育的価値があると感じさせられるか、どちらかのフィルターにかからないとインセンティブがない。企画段階でその辺りのリサーチから一緒に取り組んでいければ。

・地域の課題について言語化していくことは大切。地域の課題はそこに住む自分たちの課題であるが、研究や専門知は私たちの幸せにつながっているということを大学側が担ってほしい。市民レベルでの活動がまずあって、社会の関心が大学に向くような仕掛けづくり。

・連携することが悪いこととは誰も思わないが、無理に連携して「やらねばならない」という負担感が生まれることも。行政側の課題と、研究者のマッチングがうまく機能すればいいが。コーディネートが必要。

4．その他

・社会教育は評価が難しい。「良かった」って何なのか。質的にモヤっとした「いいね」をどうアウトプットしていくのか。評価は数字に表れない。数値化じゃない評価の仕方（定性評価）の難しさ。アンケート形式でたくさんの人に浅く質問してデータを取るのではなく、5 人くらいに深くインタビューして言語化することも必要かもしれない。

（１５）株式会社コタキクリエイティブワークス

日時	令和 5 年（2023 年）1 月 25 日
出席者	株式会社コタキクリエイティブワークス 代表取締役 小滝、取締役営業部長 鈴木 社会教育課　課長補佐 荒井、主査 田井（記録）

１．公民館での取組みについて

・2013 年頃、公民館の職員が訪ねてきて、「講座をやってくれませんか？」と言われたのがきっかけ。一番初めは大人向けの額縁づくり講座をした。皆さん結構集中してやっていた。その後は夏休みの「親子木工教室」として定着。500 円（ワンコイン）で本格的な木工作品を作ることができる、毎年人気の講座となっている。

・子ども向け講座は楽しい。何でも自分でやろうと集中して取り組む子や、大人に助けてもらいながら進める子など、個性豊かでいろんな子がいるが、これまで 10 年近くやってきて途中で投げ出す子は誰一人いなかった。色んな反応が見られて楽しいし、講座が終了してからスタッフ同士で「あの子面白かったな」などと話すのも楽しい。

２．ボランティアを継続するための会社での取り決め

・あくまでも自由参加が基本。強制しない、させない。
・社員一人ひとりに対する気付きを促すボランティアにする。（自主性）
・自分自身の専門性を活かせるものにする。（スキルアップ）
・会社のイメージアップにはなるが、直接の利益や宣伝を追求はしない。
・自分がボランティアをしている意識が必要　など
・参加へのインセンティブ（会社からの手当てや福利厚生への還元など）

３．ボランティア活動について思うこと

・業務はイベント関係が多く、閑散期と繁忙期の差があるため、公民館講座は閑散期に引き受けている。これが継続のコツで、忙しいときに引き受けると大変すぎて続かない。正直、ボランティアというのは光の部分と影の部分（良い面と悪い面）があると感じる。講座日時が休日(土日)に設定されている場合も多く、ボランティアに消極的なスタッフと積極的なスタッフで温度差はある。準備も大変で、ボランティアのために残業したこともあった。「なぜそこまでしてやる必要があるのか」という声もあったので、社長がボランティアに対する考え方をまとめたペーパーを作成した。

・長く続いている秘訣はあえて言うなら「恒例になったから」。正直しんどいこともあるので、うまく工夫しないと続けていけない。毎回違った教材を思案し、ベニヤなどもカットして誰でも作れるキットの状態にして、当日搬入する。ケガをしないように角を丸めてお

くなど、準備が大変。作業中も小さい子がウロウロしているので、気を遣う。

・あまり大変すぎると「もっと簡単なものにしよう」とか「忙しくて人出がいない時期に引き受けるのはやめよう」などと考えるようになる。そういったやりくりをしながらここまで続いてきた。これからも続けられるかは正直分からないが、このボランティア活動は自分の職業を通じて社会貢献しているという意識を社員に持たせるために必要なことで、これにより自身の仕事スキルが上がると考えている。また会社にとっても地域でボランティアしていく事は企業の存在価値を高めるものなので一過性に終わらないように努力して続けていきたい。

・他にもボランティアの話は来ているが、遠い地域だったり企業からの依頼だったりの場合は断っている。

・子ども達が喜んでくれるのは嬉しい。ボランティアに対してあまり乗り気じゃなかった職員でも、終了後は良い顔になっていたりする。

発　行：豊中市社会教育委員会議
事務局：豊中市教育委員会事務局社会教育課

住所：〒561-8501
豊中市中桜塚 3-1-1
電話 06-6858-2582
FAX06-6846-9649